

初期ふり遊びにおける表象の萌芽と発展

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

ふり遊びに関する研究は、これまで多くの研究者によって注目されてきたテーマである。Piaget は、子どもがふりをする能力に着目し、そこに表象の起源をみいだした。表象はシンボルの形成を支える役割を果たし、その表象機能によって子どもたちの遊びは創造的になっていく。そして、その表象は生後 2 年目に発生するとされている。Piaget 以後、ふり遊びの研究は、脱中心化、脱文脈化、統合化、といった視点から、その構造に関する詳細な検討がおこなわれた。しかし、そこでの研究の中心は、表象機能ではなく、むしろ象徴機能にあった。つまり、Piaget の「能記」と「所記」の分化という視点からの研究が主流であった。そして、1980 年代「心の理論」の提唱により、子どものふりをする能力は、他者のふりを理解する能力として注目を集めるようになった。ここでは、他者のふりを理解しているか否かが実験的に検討され、その結果 2 歳児は他者のふりを理解したうえで、ふりをおこなっているという見解が広く述べられるようになった。しかし、これらの研究では、子どもがふりをする能力が、ふりの理解という狭い視点でのみ検討されており、そこに存在する様々なふりのレベルについては十分な研究がなされていない。

本研究は、初期ふり遊びにおける表象機能の発達を、発達段階との関係から分析し、その発達の質的な変化を検討することを第一の目的とした。さらに、本研究では、子どものふりをする能力を表象機能の発達という視点から検討していくことを重視した。従来の象徴機能に焦点をあてた研究では、シンボルの有無に重点が置かれ、シンボルを支える表象機能の存在が十分に検討されてこなかった。本研究では、表象がどのように子どものふり遊びを発展させていくのかを明らかにすることが目的であり、よって表象機能により重点を置いた研究をおこなった。また、本研究は、初期ふり遊びに関する実験課題を独自に設定したことから、その課題の妥当性を検討していくことも目的の一つとした。

本研究では、1 歳 0 ヶ月から 3 歳 2 ヶ月の乳幼児 89 名に対して実験をおこなった。被験児は、月齢別に区分し分析をおこなうとともに、田中(1980)の「可逆操作の高次化における階層 段階理論」に基づき発達段階別に区分して分析をおこなった。本研究は、実験 1: 機能的行為(機能的行為 1、機能的行為 2)、実験 2: 見立て行為(自分への行為、人形への行為)、実験 3: ふり行為(代用、マイム)の 3 つの実験から構成されている。また、本研究は研究の妥当性を検討することを目的としているため、各実験にはそれぞれ 6 つの課題を設定した。さらに、本実験を設定するにあたっては、実験 1, 2, 3 の順番にふり遊びは出現し、同時に表象のレベルが発展していくという仮説をふまえて課題の設定をおこなった。つまり、現前しないものを想起するレベルが高くなるように実験を設定した。

分析の結果、本研究でおこなった実験課題(全 18 課題)は、発達段階との関係から 4 つに区分されることが示唆された。道具を使ってそこにあるはずの食べ物や水を見立てる行為(見立て行為)は、初期ふり遊びの発生時(1 次元形成期から 1 次元可逆操作初期)にみられ、現前しないものを身振りで見立てる行為(ふり行為)は、初期ふり遊び発生後しばらく

くしてから（1次元可逆操作後期から2次元形成期）出現する可能性が示唆された。よって、現前しないものを想起する表象のレベルが、初期ふり遊びの発達と関係しているとする仮説は、ある程度支持される結果となった。

以上のことから、本研究では、表象の萌芽は、「見立て行為」にあり、表象の発展は、現前しない対象を身振りのみで現す「ふり行為」にあると考え、「見立て行為」から「ふり行為」への移行に表象機能の萌芽から発展への移行が達成されると考察した。また、発達段階との関係から述べると、田中（1980）の理論による、1次元可逆操作の獲得とその系列化が表象の発達に関係していることが示唆された。

今後の課題としては、本研究の実験結果と自然観察場面における子どもの自発的な遊びの観察の双方から、初期ふり遊びの発達を検討していくことが挙げられる。また、本研究では、表象の萌芽から移行への姿は十分に検討されておらず、その質的变化の詳細な検討が今後の課題として挙げられる。